

C.J.L.アルムクヴィスト『女王の宝石冠』研究  
－暗示的な執筆法とその美学－

言語文化研究科言語社会専攻 大鋸瑞穂

目次

1. はじめに
    - 1.1. 論文概要
    - 1.2. 先行研究
    - 1.3. 作品あらすじ
  2. 「二種類の執筆方法について」 “Om två slags Skriftsätt”
    - 2.1. 『作品の終わり方についての対話』 *Dialog om Sättet att sluta Stycken*
    - 2.2. 明示的な執筆法と暗示的な執筆法
    - 2.3. 暗示的な執筆法の美学
      - 2.3.1. 読者反応理論
      - 2.3.2. ロマン主義とリアリズム
      - 2.3.3. 作品構造
  3. 『女王の宝石冠』 *Drottningens juvelsmycke* 分析
    - 3.1. 断片
      - 3.1.1. 総合芸術 (Allkonstverk)
      - 3.1.2. ロマウント (Romaunt)
      - 3.1.3. 詩的フーガ (Poetisk Fuga)
    - 3.2. 空白
      - 3.2.1. 空白としてのティントマーラ
      - 3.2.2. 空白と対話
    - 3.3. 共創
  4. まとめ
- 使用テキスト  
参考文献  
インターネット上の参考ページ

## 要約

本論文は19世紀に活躍したスウェーデン語作家カール・ヨナス・ローヴェ・アルムクヴィスト(Carl Jonas Love Almqvist, 1793-1866)の代表作『女王の宝石冠』*Drottningens juvelsmycke* (1834)を、作者が自身の論考「二種類の執筆方法について」“Om två slags Skriftsätt”(1833)の中で提示した「暗示的な執筆法」の美学を反映した作品として分析し、その主題を考察するものである。『女王の宝石冠』は1792年のグスタフ三世暗殺事件という史実を下敷きとした歴史フィクション作品であり、物語は両性具有的な魅力を持つ謎多きバレエダンサー・テイントマーラを中心に展開する。散文、戯曲、詩が組み合わされた独特の執筆形式によって書かれた本作は、アルムクヴィストの著述業の大半が収められた枠物語形式の作品集『野ばらの書』*Törnrosens bok*(1833-51)の第四巻に収録された作中作であり、外枠のストーリーにおける登場人物リッカルド・フルモによる語りを導入としている。作品冒頭にて、リッカルドは自らの語りの典拠となる資料が不完全であることを述べ、物語内にいくつかの空白があることを示唆する。そして聴衆ならびに本作の読者に対して各々の考察と豊かな想像力によってその空白を埋め、物語全体を完成させるように願い出る。

第一章では本論の導入として上述のリッカルドの台詞を引用し、本作が作品と読者との関係性を主題とする可能性について言及した。

第二章では作者の提示する暗示的な執筆法の美学をひも解くべく、論考「二種類の執筆方法について」の内容を多角的な面から分析した。論考内でアルムクヴィストは作品を執筆する際、読者に向けた二つのアプローチの仕方があると説明する。一つ目は作者が主題に関する全てを明確に語り、それによって読者がただ受動的に「読む」以外のことを必要としなくなる書き方(「明示的な執筆法」)、二つ目は作者があえて全てを明確に語らないことによって、読者自身が能動的にテキストの中に分け入り、生産的な方法で「読む」ことを可能にする書き方(「暗示的な執筆法」)であり、後者の書き方によって作者と読者は一つの作品における二人の共創者となり、読者が増え続ける限り、作者の仕事は半永久的に完成され続けるのだと言う。本章では読者反応理論、ロマン主義とリアリズム、作品構造という三つの観

点からこの暗示的な執筆法の美学を考察、検討した。初めにアルムクヴィストが論考内で提示した曖昧な執筆法の理念は読者反応理論の先駆的な一例であるとともに、これが不確定なものを読み解こうとする読者の人間的欲求を喚起する技法であることを述べた。またこの執筆法がこの世のあらゆるものの断片性を前提とし、それが全体へと連関することを目指した執筆法であると同時に、アルムクヴィストにとってロマン主義とリアリズムを結び付けるものとして理論付けられている点を明らかにした。さらにアルムクヴィスト作品に典型的な重層的な枠構造もまた、断片的な要素を結び合わせる読者による生産的な読みを暗示的に要請するものであることを述べ、次章の作品分析への布石とした。

第三章では前章での考察を踏まえて、「断片」と構成、作品の「空白」、読者との「共創」という三つの観点から『女王の宝石冠』を分析し、本作を暗示的な執筆法の美学を主題とした物語として読み解くことを試みた。まず本作の構成を特徴付ける三つの要素、「総合芸術」、「ロマウント」、「詩的フーガ」がどれも暗示的な執筆法の「断片」の思想を基にしている点を明らかにした。次に本作の中心人物ティントマーラの人物造形における空白性に焦点を置いたテキスト分析により、ティントマーラを物語の「空白」を表象するキャラクターとして提示した。また本作においてこの「空白」が異なる者、異なる思想同士の相互的なコミュニケーションを促す場として描かれている点について触れ、それが暗示的な執筆法の美学が基とする人間観に共通していることを明らかにした。最後に本作における作品を介した作者と読者の「共創」の例として、本作のアダプテーション、引用、二次創作、作品研究を挙げ、作品発表から約二世紀が経とうとしている今なお続く本作と読者との絶えざる対話をそれらに見出し、本作を読者によって永遠に完成され続ける作品という、アルムクヴィストの暗示的な執筆法の理想を体現した作品として位置付けた。

以上の分析から長編『女王の宝石冠』は作者と作品、読者の関係性におけるアルムクヴィストの問題意識を物語の形で暗示するもの、彼自身の創作行為についての物語であり、読者の創造的な読みによる新たな解釈によって永遠に紡がれ続けるテキストであるところ結論付けることができた。